

大伴家持歌の題詞・左注表記「独」の特徴

吉 村 誠

一、はじめに

万葉集の用例で「独り」という語が詠まれているものは、歌語として七十八例、題詞・左注にあるものは二十例存在する。その中で大伴家持は、歌語中に九例、題詞・左注に九例の語を用いている。ここで注目すべきは、題詞中に用いられている「独」で、「独……作歌」という形態をとっているものは、家持の用例に限られているということである。このことから題詞が歌詠の「場」を読み取る手段とされ、「独詠歌」の概念を形成する根拠となっている。

しかし「独詠」の場を集団との関わりでとらえると、純粹な「独詠」の存在そのものが疑われてくる。「歌」とは、個の表出の象徴であり、常に他人を意識した中で様式化されたものであると理解出来るからである。全くの個人詠が

当時においても存在したと仮定しても、万葉集収載歌の範囲においては、集団の影を常に引きずっているであろう。

とすると、社会性を有する歌の場の説明にことさら「独」という状況が語られる必然性が疑問となる。「独」という語がつけられることによって、読者に「独」の訴えかけがなされているということは容易に理解し得ても、作歌状況の「独り」の場を何故説明しなければならないのかという点が不可解だからである。このように考えると、「独」が単なる場の状況のみを指示している語であるというばかりでなく、歌内容と密接に結びついた心情的内容を含んだ意味を有しているのとらえなければならなくなるであろう。

そこで本稿では、主に大伴家持の題詞・左注に示される「独」という表現のあり方について、その性格と意味について探ってみたい。ただ本稿は、独詠の「場」を考えるも

のではない。そのことを考えるためには、まず「独」の状況を示す表現意図をとらえなければならぬという観点に立つからである。「独詠の場」の状況にはわかにはとらえ難いと思われるので、あくまで、家持歌の題詞に「独」とつけられるあり方に興味のあることをことわっておきたい。

二、家持歌の題詞・左注

「独」のあり方を考えるにあたって、まず万葉集中の題詞・左注の用例を掲げる。便宜上家持の題詞・左注とそれ以外のものに分ける。

家持歌以外の題詞・左注

- ①時石石川女郎 自成雙栖之感恒悲獨守之難 意欲寄書未逢良信 (2・二二六左注)
- ②於是大家石川命婦依餌藥事往有間温泉而不會此喪 但郎女獨留葬送屍柩既訖 仍作此歌贈入温泉 (3・四六一左注)
- ③禍故重疊 凶問累集 永懷崩心之悲 獨流斷腸之泣 但依兩君大助傾命纒繼耳 (5・七九三序文)
- ④嗟乎痛哉 紅顏共三從長逝 素質与四德永滅 何圖 偕老違於要期 獨飛生於半路 (5・七九四序文)

⑤如有贖而可免者 古人誰無價金乎 未聞獨存遂見世終者 (5・悲歎俗道假合即離易去難留詩一首并序)

⑥市原王悲獨子歌一首 (6・一〇〇七題詞)

⑦右一首或云 元興寺之僧獨覺多智 未有顯聞 衆諸狎侮 因此僧作此歌自嘆身才也 (6・一〇一八左注)

⑧見河内大橋獨去娘子歌一首并短歌 (9・一七四二題詞)

⑨忽辱恩賜 驚欣已深 心中含咲獨座稍開 表裏不同相違 何異 (18・四二二八序文)

⑩尋誦針袋詠詞泉酌不渴 抱膝獨咲能饜旅愁 陶然遣日何慮何思 短筆不宣 (18・四一三三二序文)

⑪為遣水主内親王賦雪作歌奉獻者 於是諸命婦等不堪作歌 而此石川命婦獨此歌奏之 (20・四四三九左注)

家持歌の題詞・左注

⑫十年七月七日之夜獨仰天漢聊述懷一首 (17・三九〇〇題詞)

⑬十六年四月五日獨居平城故宅作歌六首 (17・三九一六 (二一題詞))

⑭右六首歌者天平十六年四月五日獨居於平城故鄉舊宅大伴宿祢家持作 (17・三九一六 (二一左注))

⑮對此節候琴罽可翫矣 雖有乘輿之感不耐策杖之勞 獨臥帷幄之裏 聊作寸分之歌輕奉机下犯解玉頤其詞曰

(17・三九六五序文)

⑬獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌 (18・四〇八九題詞)

⑭右大伴宿禰家持獨仰天海作之 (20・四三二三五左注)

⑮右歌六首兵部少輔大伴宿禰家持獨憶秋野聊述拙懷作之 (20・四三一五―二〇 左注)

⑯獨惜龍田山櫻花歌一首 (20・四三九五題詞)

⑰獨見江水浮漂糞怨恨貝玉不依作歌一首 (20・四三九六題詞)

全文を掲げると長くなるので、用例のあらわれている部分のみを掲げる。多くの用例は、左注にも存在している。題詞と左注では機能的に見ると性格が異なるが、歌の補足的説明として表現面にとらえると同様のものとして、同列に扱うことが出来るであろう。

家持歌の題詞・左注とそれ以外のものを比較してまず気づくことは、「独」表現の形態である。家持歌以外の題詞・左注は、いずれも作者の外的状況を示した語として働いている。①は、独身であることを示したものであり、また②③は、作者の行為が単独であることを示している。また④⑤⑥⑦は、「獨子」「獨飛」「獨覺」という熟語とともに、単独の意味で用いられたものである。

それに対して、家持歌の題詞・左注は、いずれも作者の

作歌時の状態を示したものとなっている。⑫⑬は、「独り」の状態での七夕詠であり、⑭⑮は、平城故宅にいる様子と言ったものである。また⑯⑰⑱⑲⑳は、それぞれ「独りいる」「独り憶ふ」「独り惜しむ」「独り見る」といったように作者の行動を説明したものである。つまり家持歌の題詞・左注は、「(作者が)独り……の状態の時に……について作った歌」という形式になっていることに注意される。

このことは、家持歌以外の題詞・左注が単に作者の作歌時の客観的行動を外的な視点からとらえているのに対して、家持歌のものは作歌環境における「独り」の状態を説明したものと表現していることと受け取ることが出来る。この表現方法は、「独」であることへの強調をともなっているという特徴を示しているであろう。「独」字の有無が、前者では表記されていないと意味が不明になるのに対して、後者はことさら「独」字がつけられていないとしても、意味そのものに大きな変化は認められないからである。例えば⑳において、「十年七月七日之夜、仰天漢聊述懷」とあつたとしても、七夕歌詠の状況理解に大きな障害とはならない。

このように考えると、家持歌の題詞・左注における「独」表現は、単なる歌作時の状況を示すのに用いられているのにとどまらず、何らかの意味を持っているものとしなければならぬことになる。

そこでまず考えられることは、「独」自身の意味理解である。「独」の意味を一例として『文選』の用法を中心にし、『大漢和辞典』の「独」の分類に基づいてとらえるると以下のようになろう。

(1) 単独でという不特定多数の他人を意識したものの。

孰者か克く尚へん。私心 獨り悦び、之を樂しむこと
無量なり (「神女賦」 宋玉)

軍を全うして獨り剋ち、 (「在元城與魏太子牋」 吳季重)

(2) ただけという他と比べた場合の独りの意味であり、補佐するものがないという用法。またただけでなく、というような専らにという意味。

荃 獨り民の正爲るに宣し (「少司命」 屈平)

先王は獨り治むるの久しうする能はざるをすれば、
(「六代論」 曹元首)

(3) 自ずから、専らという意味。

朝雲 興らずして、潢潦獨り臻る。 (「南都賦」 張平子)

神氣は以て醇白にして獨り著る。 (「養生論」 嵇叔夜)

(4) 人と異なるという孤高的意味に用いられたもの。
流俗の未だ悟らざるを愍み、獨り超然として先づ覺

めたり。 (「嘯賦」 成公子安)

(5) 独自の才能という卓越した意味。

遠く踏んで獨り遊ぶ (「東方朔畫贊」 夏侯孝若)

(6) 孤独感をともなつた片われ的な独りの用例。

形は枯槁して獨居す。 (「長門賦」 司馬長卿)

獨夜 寐ぬる能はず (「七哀詩」 王仲宣)

(7) 他に連れがなく全くの独りの意味で、孤独感をともなつたもの。

獨り隅に向かひて涙を掩ふ (「笙賦」 潘安仁)

憂思して獨り心を傷ましむ (「詠懷詩」 阮嗣宗)

任意の用例を掲げてみた。作者の心理面を読み取る中で一概に区別することの困難な例もあるが、敢えて辞書的に分類すると以上のようなになると思われる。もちろんこの用例の中には助字的な用法は含めていない。今は『文選』に見られる「独」の用法に限って見たが、家持歌などに影響を与えたと思われる漢籍一般にも同様の分類が出来ると思われる。

この分類と、今の題詞・左注の「独」の用例を比較して気づくことは、家持歌以外のものは、(1) (3) の「単独」という意味に「独」が用いられているのに対して、家持歌の題詞・左注は、孤独感をともなつた「独」の作用が働いていることである。このことは、題詞・左注が家持

自身によって記されていると考えるならば、なおさら強く感じられる。今は、表記者のことは考慮にいれないが、いずれにしても「独」の訴えかけは、家持歌の題詞・左注の場合、家持以外のものと異なっており、内面心情的要素が強く加わっていると理解出来る。

この孤独感には、まず状況面からとらえることが出来る。⑫⑬⑭の七夕詠においては、七夕行事を背景とした七夕歌詠の状況下であって、背後には宴という集団の場が付随している。そうした中で、家持の七夕詠への執着は、宴という集団性から離れた場において成立しており、集団との対立が「独」という表現の中に存在していると思われる。同様に⑮⑯においても、難波遷都時である状況を考慮に入れる時、平城故宅に滞在している作者の難波の官人集団からの離脱が、「独」に集約されていると言えるし、⑮⑯は、越中時代の下僚大伴池主を中心とした官人との対比、また⑮⑯⑰は、難波赴任における都の官人集団からの離脱が、「独」表現の背後にあると指摘出来るよう。そうしたものは、「片われ」的「独」であるとも言えるが、集団との対立の中に生じる「独」がことさら表記されているということに注意しなければならぬであろう。つまり読者に対して「独」であることの強調がここになされていると思われるからである。

このように見ると、家持歌の題詞・左注の「独」は、孤独感の訴えという内面心情的な意味を含んだものであると受け取ることが出来る、その読み取り方の中には、単なる状況伝達目的ではない意図のあることに気がつく。ここに家持歌の題詞・左注は、歌詠の場を説明しているという消極的表現ではなく、自覚的な「独」の主題化が行われていると見ることが出来る。つまり題詞・左注も含んだ形で歌の作品化が行われているということである。

辰巳正明氏は、歌の主題の成立において、題詞における「題」の確立を説明されている¹⁾。一般的に題詞は、歌の成立事情を説明したものであるとして理解されており、そうした点で題詞の「題」への展開を指摘された辰巳氏の見解は、新しい観点であると評価出来る。家持歌においても歌の主題を題詞に記したものは認めることが出来る、辰巳氏が述べられているように、家持は憶良、旅人の方法を通じた題詞における主題表記の概念を既に認識していたと認められる。もちろん今の場合、主題化の概念は、そのままの形で適用することは出来ない。具体的に言うならば、「独」の主題があつて歌が作られているとは考え難い。「独」表記は結果的なものであり、まず「独」状況下にあつて歌作がなされ、「独」と表記された題詞による説明が付加されたものであろう。しかし題詞・左注の「独」は結果として、作品を規

制する主題となっている。表記者（原表記者は、作者自身と考えられる）は、主題としての「独」の効果を意識した中で、題詞・左注に「独」表現を行ったと考えて誤りはないであろう。

三、中国文学との比較

家持歌の題詞・左注の「独」が、それ自身孤独感を主張するものとして働き、集団との対立を意図するものであるということになれば、その表現の基準となる用法を確認する必要がある。ここに中国文学との関係を考える必要がある。題詞・左注の原表記者が作者と同一であるとするならば、中国文学の教養に根ざした表記の方法を行っていると考えられることは容易なことだからである。また題詞・左注表記は、単なる情報伝達のために表記されているのではなく、内面心情の表現として用いられているとするならば、それは中国文学における「独」表現のあり方と密接な関係を持っていると考えられる。

中国文学といっても非常に幅の広いものであり、全てを網羅した中でその用法をとらえることは不可能に近い。しかし本稿では「独」表記のあり方に主題をおいているので、特定の一作品中にあらわれる「独」の形態をとらえることで、十分に特徴を見ることが出来ると思われる。中国文学

の各作品にあらわれる「独」の用法に、特に例外はないと思われるからである。そこで家持を中心とする奈良朝貴族層の教養の基本であったとされる六朝期に編纂された『文選』の「独」の用例と比較して、家持歌の題詞・左注の「独」の意味をとらえてみることにする。

『文選』中の「独」の用法は、全てが作品中にあらわれているものであり、詩文の題となっているものはない。この点で題詞中の「独」用法と比較することは質的な相違も含まれるであろうが、題詞そのものが作品化されているという観点に立つならば、同次元で比較することは許されよう。『文選』においては、二二六例「独」の用例がある。辞書的な意味分類は先述した通りであるが、その中で家持歌の題詞・左注と関連するものは、孤独感をともなった「独」表現である。

ただ、孤独感をともなうという情意的意味は、読み取り方の問題でもある。基本的には客体の行動説明以外の心情表現として用いられている語すべてに適用される。また多くは「片われ」的状况の中で発せられているものである。そうした点を考慮に入れると、孤独感を示す「独」表現は、意味的にかなりの幅を持った語として現れる。

「独」は、言うまでもなくそれが発せられるとき、他者を意識した中で自己が単独である状態を述べることを基本と

している。しかしそれが客体行動を描写する要素が強いときは、先ほどの分類の(一)―(三)までの意味になる。また自己の意識として他者と対立し、なおかつその状況を他者に訴えるという作用が伴う時、(四)以下の用法として読者に受け取られることになろう。このことを考慮して家持歌の題詞・左注の「独」の意味と最も近接しているものは、(六)以下の用例が中心となる。

しかし(四)以下の用例の中でも、現象として現れている内容は様々である。まず、「独」の訴えが最も強く、読者への共感を求めているかのように思える用例に以下のものがある。

- ㉞ 侘として鬱邑して余佗傑し、吾れ獨り此の時に窮困す。
寧ろ溘に死して以て流亡するも、余は此の態を為すに忍びず。(「離騷經」 屈平)
- ㉟ 獨り旦を申へて寐ねられず。蟋蟀の宵に征くを哀む。
時は疊疊として中を過ぐるに、蹇淹留して成る無し。(「九辯」 宋玉)

㉞は、屈平の「離騷經」の中にあるものであり、社会批判に対する孤高性を示した孤独感があらわれている。また㉟は、宋玉の「九辯五首」と題にあるものの中の第一首目の詩である。憂愁の情を持つ孤独感の出ているものであるが、『李善注』が言うように、屈原の情感を代弁したものと

して表現されている。こうした例は『文選』中三一例を数えることが出来る。

このような用例は、集団と対峙する自己を強く表明したもので、孤高的精神の高揚であると判断できる。孤独感を伴った表現として認めることは出来るが、それが自己内面に向かう孤独感ではなく、社会的状況の中での阻害感を伴って現れている。そしてその延長にあると思われるものは、次の用例であろう。

㊱ 寒暑は一時に在り。繁華は春に及んで媚かなり。君平獨り寂漠たり。身世兩つながら、相棄てたり。(「詠史一首五言」 鮑明遠)

㊲ 既に自ら心を以て形の役と為す、奚ぞ惆悵して獨り悲しまん。(「歸去來一首」 陶淵明)

㊳ 宵耿介として寐ねられず、獨り華省に展轉す。時歳の適盡くるを悟り、慨として首を俛れて自ら省みる。(「秋興賦」 潘安仁)

㊱は、鮑明遠の「詠史一首」と題にあるものであり、世俗を超越した嚴君平の様子を述べたものである。この「獨」は、君平と世俗とを比較した中で示されている表現であると言える。そして㊲は、陶淵明の有名な「歸去來一首」の冒頭部分であり、共感者のいない孤独性を表現したものである。「獨」自身には社会批判は認められないが、疎外感を

持った意味として示されている。

こうした例は、隠遁を事態とする「独」の用法であり、孤高的精神も含まれていると見ることも出来るが、社会批判性は先の例に比して弱くなっている。しかし社会集団に対する対立性の含まれているものであり、思想性の含まれた「独」の表出であると言える。

また◎の用例は、自己の不遇を嘆く状況の中で「独」が表出されており、隠遁性と言うほどの意志は示されていないが、反社会を意識した「孤独感」として注目される。

家持歌の題詞・左注の例においても、そうした要素の認められるものは存在する。先述の題詞・左注の用例の中で、⑬⑭の例は、当時の政治情勢に対する批判的態度を背後に秘めていると読みとることも出来るし、⑮⑯⑰は、難波京に赴任している一方で、都の官人集団への疎外感も伴っていると受け取ることが出来る。

しかし、歌内容に政治的批判が含まれているように思えないことと、孤高精神に見られる政治社会への対立性が家持歌の場合は希薄であると受け取られる点で、こうした中国文学の用例とは対応していないであろう。この点は、中国文学と家持歌を代表とする和歌との決定的相違であると思われる。中西進氏も早く指摘されているように、²⁾諷喻性という方法で体制批判を文学上許される中国文学の性格

と、遊芸の文学という形態で育ってきた奈良朝和歌との相違がそうした中に示されているように考えられる。

情意的意味での「孤独」が表明されていると思われるのに、以下の用例がある。

⑱日は黄昏として望みは絶え、悵として獨り空堂に託く。明月懸かりて以て自ら照らし、清夜に洞房に徂く。

〔長門賦〕 司馬長卿

⑲夜中なるも寐ぬる能はず。起き坐て鳴琴を弾ず。薄き帷は明月に鑑り、清き風は我が衿を吹く。孤鴻は外の野に號び、朔鳥は北の林に鳴く。徘徊して將た何を見、憂思して獨り心を傷ましむ。〔詠懐詩一七首〕

阮嗣宗

⑳獨り空堂の上に坐す。誰か與に欲しむべき者ぞ。門を出て永路に臨むも、車馬を行ける見ず。高きに登りて九州を望めば、悠悠として曠野分かる。孤鳥 西北に飛び、離獸 東南に下る。日暮 親友を思ふ。晤言して用て自ら寫かん。〔詠懐詩一七首〕 阮嗣宗

㉑仰ぎて白日の光を視れば、嶮嶮として高く且つ懸なり。八紘の内を兼く燭らし、物類に頗偏する無し。我獨り深き感を抱きて、與に焉に比ぶことを得ず。〔贈徐幹一首〕 劉公幹

㉒朱火は獨り人を照らし、景を抱いて自ら愁怨す。誰か

知らん心曲の亂るるを。思ふ所論ずべからず。(「雑詩一首」 王景玄)

⑩は、司馬長卿の「長門賦」の一節であり、哀傷の部立てにあるものである。武帝に退けられた陳皇后の寂しさを描いたもので、この部分は帝の訪れない悲しみの情を述べたところである。ここに表現されている「独」は帝に対する片われ的な意味で用いられているが、万葉集における「片われ」の意味と異なる点は、詩文そのものが相手への贈歌となっておらず、特定の相手に訴えかける語として「独」が働いていない点である。客体の「孤独」を読者に対して訴えかけた働きを持ったものであり、小野寛氏が説かれるように「鬱屈」の情や、孤独の心情を「悲しみ」を交えた感情で、漠然と強調している。

また⑪は、阮嗣宗の「詠懷詩一七首」と題にある第一首目であり、夜中の言い様のない傷心の情を描いたものである。家持の題詞の⑫などに見られる理由の不明確な独詠などとも関係があるとも考えられ、いわゆる家持の独詠述懐と比較する上において、重要な要素を持っているものと言えるであろう。⑩は⑪と同じく阮嗣宗の詠懷詩一七首中の一五首目である。友人への思いを述べたものであり、孤独のわびしさを表現している。

それに⑬は、劉公幹の「贈徐幹一首」中のものであり、

友人に対するものである。自分独りの深い憂いを強調した表現になっている。最後の⑭は、王景玄の「雑詩一首」と題にあるもので、『玉台新詠』にも収載されているものである。遠方にいる夫を思い続ける妻のわびしさを歌ったものである。孤独の憂いを述べている。小野寛氏が春愁歌との比較において提出されたものとも重なるが、いずれも孤独の訴えを感情の中で表出している点で、孤高的意識とは異なるものである。

ここで注意されることは、そうした「独」の働きを持つ詩文は、別離した友人や夫に対する孤独を憂愁の情を交えて表現しているものが多く、情詩の類に分類される性格を持つていることである。情詩と万葉集との関係は、はやくに中西進氏が額田王歌との比較において指摘され、^⑮相聞発想の基盤の一つになっていると認められるものであるが、「独」を中心とした孤独感の性格においても、家持歌の題詞・左注と共通点を見出すことが出来る。

このように考えると、題詞・左注の「独」の働きは、漢詩文の中でも情意的意味で用いられる「独」の働きと類似しているのとらえられ、家持歌の題詞・左注の「独」表記の有効性はここに存在すると指摘出来るよう。

四、題詞・左注の「独」と歌語の「ひとり」

万葉集中の「独り」の形態については、川口常孝氏が既に詳述されている⁶。また「孤独」の性格については、中川幸広氏に鋭い指摘があり⁷、いわゆる「孤我」の意識的対立ではなく、「感情」としての「孤独」であると説かれている。そこでここでは、そうした感情としての「孤独」という見方を踏まえた上で、「独」の主題化について、題詞・左注の「独」と歌語としての「独り」の関係を探ってみたい。歌語中の「独り」については七八例万葉集中に用いられている。家持歌は九例見られる。その多くは川口氏の説かれるように「片われ」の状態の訴えとしての「独り」である表現が多い。

弁基歌一首

真土山夕越え行きて^{いほまき}廬前^{いほまき}の角太川原にひとりかも寝む

(3・二一九)

右或云弁基者春日歳首老之法師名也

中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首

ひとり寝て絶えにし紐をゆゆしみと為むすべ知らに音のみしぞ泣く (4・五一五)

大伴宿祢家持報贈紀女郎歌一首

ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶ

せかりけり (4・七六九)

恋人との対比、あるいは望郷といった主題にささえられて表現されているものである。家持歌の例においても、鬱屈や孤独感の感情を伴っていると認められる歌が存在するものの、右の例のように相対化された「独り」の表現となっているものが多い。ただ次の山上憶良の場合は、「独」の主題化に対して一歩進んだものとみなし得よう。

春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮

らさむ 筑前守山上大夫 (5・八一八)

梅花宴三十二首中のものである。この歌の「独り」の表出については、憶良の妻の死に対する孤独感であるとか、旅人の妻の死に対して代弁したものと⁸いう見解も提出されているが、心情はともかくとして集団宴の讚美の中に「独り」が主張されていることに注意される。集団との対比の中に示される「独り」の発想は、個我の強調として主題の中心をしめていると思われるからである。

そうした中で家持の春愁歌は、周知のように極めて特殊な形態を作り出している。

廿五日作歌一首

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば (19・四二九二)

川口氏は前掲論文において「独り思う」と表現したもの

は、家持歌の例のみであり、「思念」の「孤独」であると評されている。確かにここに示されている「独り」は、他の例の「独り」意識と異なり、状況を見つめた内面的な様相を見出すことが出来る。しかしこの歌の「独り思う」の内容についてはまだ幾多の論があり、そこに踏み込むと様々な角度からの考察が可能になってしまふので、ここではその形態のみを考えることにする。

この歌の特殊性は独り思う対象が修辭的に明確にされておらず、その結果として「悲し」という情意語が表出されている点である。つまり「独」は、多くの例のように相対的な「独」の用法ではなく、自己内面に向かう心情の世界としてあらわされているということである。この特徴は、家持自身の他の作歌例においても見ることは出来ない。多く論じられているように、「孤独」への追求を経験した家持の完成された表現であると評価することが出来る。

さて、ここで「片われ」としての「独り」の用法と家持の春愁歌との間で見方を変えようと、重要な変化のあることに気がつく。表現に対する視点の変化があるからである。それは、「片われ」として相手に訴える手段としての表現から、自覚化された「孤独」の主題化が行われているということである。この観点は題詞の「独」をとらえるとき、主題化への自覚としての性格を示唆するものと言うことが出

来よう。

こうした中で注意されることは、家持歌において「独」を含む題詞・左注と歌語中の「独り」の存在が重なっていないということである。読み手にとって題詞・左注が歌を規制するものであるとすると、歌語中の「独り」表現は、歌自身が独立性を持ち、題詞・左注はそれに付随した説明としての意味になる。この場合、目的としての「独」の表出という性格が強くなると理解出来るもので、「個」の状態における「独」への依存とも言うべきものとなる。

一方で題詞・左注に「独」とある家持歌においては、「独」語は歌の示す心情を強調する働きがあると受け取ることが出来る。

十六年四月五日獨居平城故宅作歌六首

橘のにはへる香かもほととぎす鳴く夜の雨にうつろひ
ぬらむ (17・三九一六)

ほととぎす夜声なつかし網ささば花は過ぐとも離れず
か鳴かむ (同・三九一七)

橘のにはへる園にほととぎす鳴くと人告ぐ網ささまし
を (同・三九一八)

あをによし奈良の都は古りぬれどもとほととぎす鳴か
ずあらなくに (同・三九一九)

鶉鳴く古しと人は思へれど花橘のにはふこの宿

(同・三九二〇)

かきつばた衣に摺り付けますらをの着襲きひ獵する月は
来にけり (同・三九二一)

右六首歌者天平十六年四月五日獨居於平城故郷舊宅
大伴宿祢家持作

難波遷都時に平城故宅において家持が詠んだものである。
以前に詳しく論じた歌群でもあるが、全体は「橋」と「ほととぎす」を詠じることによつて、「うつろひ」の心情の中で、直前に薨去した安積皇子への追悼を主題としたものであると言ふことが出来る。先にも触れたように題詞・左注の「独」は、難波京の時代に単独で平城故宅に居るといふ意味にも受け取ることも出来るが、歌の主題と関わらせてとらえると、むしろその中心は、亡き安積皇子への追悼の心情からくる孤独感と無力感を示していると見えよう。そうした所に歌内容と密接に題詞・左注の「独」がかかわっていると指摘出来る。

また同様のことは、次の歌群によつても知られる。

獨惜龍田山櫻花歌一首

龍田山見つつ越え来し櫻花散りか過ぎなむ我が帰ると
に (20・四三九五)

獨見江水浮漂糞怨恨貝玉不依作歌一首

堀江より朝潮満ちに寄る木屑貝にありせばつとにせま

しを (同・四三九六)

在館門見江南美女作歌一首
見たせば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛し

き誰が妻 (同・四三九七)
右三首二月十七日兵部少輔大伴家持作之

この歌は、左注にもある通り天平勝宝七年、家持が防人
檢校の為に赴いた折の難波での歌である。詳しくは別稿に
ゆずりたいと思うが、歌全体の性格は多く論じられている
ように、望郷歌と見て誤りはないであろう。この中で一首
目は、往路に咲いていた龍田山の桜を帰路は散っているで
あろうことを予想して惜しむという主題を持つ歌であるが、
その惜念の情の中には桜の散る頃まで滞在しなければなら
ない自己の感情を先に帰京した他の官人達に訴えたもので
あると見ることが出来る。そうした都の官人達への心情が
題詞の「独」に結集していると言えよう。

また二首目は、「つと」という発想に都の妻を意識してい
ると見ることが出来る。その妻への恋情が現在の「独」を
強く意識したものと考えられ、その強調が題詞の表記にあ
らわれていると受け取られる。逆に三首目は、「江南美女」
を属目した中に「妻」のおもかげが収斂されていく心情で
あるととらえることが出来、妻への恋情と「美女」の融合
化が「独」を表出させない理由であると考えられる。とす

ると、この三首の歌と題詞の例においても歌の主題として含み持つ感情が、歌表現には示されず題詞の「独」において表出されている状況を知ることが出来るであろう。

また両者に「独り」であることを示していなく、かつ「独り」の場で歌われたものと思われるものも存在するであろう。例えば、

詠霍公鳥歌一首

木の暗の茂き峰の上をほととぎす鳴きて越ゆなり今し
来らしも (20・四三〇五)

右一首四月大伴宿禰家持作

は、多くの注釈書により、「独り」の場が想定されている。同じく家持歌ではあるが、こうした例は、「場」の状況による「独」の性格を持つているだけであると判断出来、「独」への自覚的主題化はなされていない状態であると言えるので、本稿では考察対象外のものとしたい。

このように考えてくると、題詞・左注に「独」とあるものは、歌に表出された心情の追加強調の目的が存在していると見られ、歌表現を規制しているものとして読者に対して訴えたものということが出来る。つまり歌中に表現された「個」の心情を主題化した立場にあり、歌表現と密接な関係にあると指摘出来る。

その「独」の表現性は、中国文学に表れた内容を習得し

て初めてなし得たと言えるし、それに伴って共同性としての「独」への理解が進んだ中で表現し得たものである。それが家持歌の題詞・左注において初めて可能であった表現形態であると言える。その題詞・左注と歌との融合が、春愁歌においてなされたと言ってもよいであろう。

五、まとめ

さらに言うならば、題詞・左注の「独」表記は「独」という表現の共同的基盤が確立されて初めて成立していると思われることが出来、「個」の心情の自覚的テーマ化の中で歌表現を規制する目的で記されたと言いうことが出来る。

以上の観点から、情意的要素を持って「独」が題詞・左注に表記されることは、家持という個性において初めてなし得たと見えるし、「独詠」への自覚化はここにおいて成立したと指摘出来よう。

注

(1) 『万葉集と主題論』『万葉集と中国文学』昭62・2

(2) 『辞賦の系譜』『万葉集の比較文学的研究 中』昭38・

(3) 『大伴家持と漢語』『上代文学』69号 平4・11

(4) 前掲論文

- (5) 「額田王論」『万葉集の比較文学的研究 上』昭38・1
- (6) 「家持覚書 — 『独』の世界 —」『万葉歌人の美学と構造』昭48・5
- (7) 「家持の自然 — 天平一六年四月五日独居の歌をめぐって —」『万葉集の作品と基層』平成5・2
- (8) 稲岡耕二 「憶良の梅花歌と七夕歌の背後」『武蔵野文学』17号 昭44・12
- (9) 「『万葉集』卷一七家持『独居平城故宅作歌』の意味」『美夫君志』33号 昭61・9
- (10) 「大伴家持天平勝宝七年二月難波歌(20・四三九五〜四三九七)の題詞『独』の特質」『山口大学教育学部研究論叢』第一部43巻 平5・12掲載予定

『文選』の書き下し文は、集英社・全釈漢文大系『文選』(小尾郊一著)の訓読・表記による。

本稿は上代文学会、平成四年一二月例会で口頭発表したものを加筆修正したものである。席上、多くの方々から質問、意見を賜った。記して深謝する次第である。

『上代文学』投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆつたりと組み、表紙に四百字詰め換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。